
人間天使と性別人間

驟雨

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

人間天使と性別人間

【Nコード】

N6191Z

【作者名】

驟雨

【あらすじ】

ごく普通の人間として、吸血鬼――グレイのパートナーを務めてきた佐川紅丞。だが、彼はある日、突然、人間を辞めてしまう……！？ 今回は性別人間シリーズ4作目。前作「性別人間と魔界少年」から見た方が多分わかりやすいかと。

プロローグ

「俺、お前の事が好きだ。」

……あの告白から、3ヶ月半くらいたった頃。

告白された当の本人、安藤未来は、一向に返事を返してくれない。それどころか、暁文とグレイにベツタリなようだった。

フラれたか？と思ったが、未来に限って断りの返事を返してくれないのは、どうもおかしい。

あいつは、人一番正義感が強いんだ。…返事なら必ず返してくれるはずだ。

でも、それがない。

まさか……忘れた？

自然消滅って奴か？

そんな事……あるのか？

にわかには信じられない。でも、あり得ないとも言切れない。

現に未来は、学校で俺と会っても、部活の話とか、グレイの話とかしかせず、告白の件についてはノータッチなのだ。

未来は、俺が告白したことを……忘れてるのか？

そうだとしたら、もし、そうだとしたら……もう一度、告白するべきなのだろうか？

……無理だ。

あの、胸の奥で、心臓が張り裂けそうになる緊張感……もう今の俺には耐えられそうにない。

もう、諦めるしか無いのか……。

そんな風に、若干ネガティブになりかけていた俺、佐川紅丞^{こうすけ}。
そんな俺は、ある日突然、人間を辞める羽目になった――。

プロローグ（後書き）

今回はまさかの紅丞視点。友人に宣伝してただけに、勝手にプレッシャー感じています。

……と、ここでとりあえず、主人公の紅丞についてちよっくら説明を。

佐川紅丞

年齢…18歳、高校3年生（今作から）。11月30日生まれ。

身長…165センチ。

未来に告白した人物。見た目は学校で上位を争うイケメンだが、性格は打たれ弱く、涙脆く、女々しい。

こんなところですね。身長165センチって高いんだか低いんだか判んないっす。

事故

「んー……。」

朝。眩しい朝日が部屋に容赦なく入り込み、俺は目を覚ました。

「眩しっ……。」

そういえば、昨日、寝る前にカーテンを閉めるのを忘れていた。

「……寒い。」

寒さに負けて、毛布をかぶる。

もう4月だが、北の大地はまだ寒い。

——実は、1週間前から高3になったのだ。

てことは、未来は高2。

……あと1年で、未来と離れてしまう。

思えば、未来に恋をしたあたりから、進学活動とか、就活とかが全く眼中に無かった。未来のことで頭がいっぱいだった。

「はぁ……。」

また今日も学校に行かねばならない。正直言うと面倒だが、いかなかったら未来に怒られそうなので、早めに支度をする事にした。

部屋を出て、階段を降りてキッチンに行く。

「喉乾いた……。」

キッチンに行き、蛇口を捻る。

水が——出ない。

「あ……水道工事で水出ないのか……。」

家の近くで水道工事を行っているため、現在我が家は断水中。仕方ないので冷蔵庫に何かないか探すことに。

「えーと、飲み物飲み物……何も無えな……。」

近頃、買い物に行っていないせいで飲み物が何一つ無かった。

「どーすっかなあ……ん？」

ふと、冷蔵庫の隅に、銀色の瓶を見つけた。……大きさはだいたい、酒の一升瓶と同じくらい。

「なんだこれ……グレイのか？」

持ち上げてみると、物凄く重たい。多分、満杯状態なのだろう。

そういえば……以前、グレイが、俺の血をコツコツ貯めている……とか言ってたな。

「てことは、これ、俺の血か……。」

銀色の瓶をまじまじと見つめ、それを冷蔵庫から取り出す。

ふたを開け、そっと匂いを嗅いでみた。

……案の定、血の匂いがした。

「喉乾いてるし……別にいいか。」

まあ、俺の血なわけだし、飲んでしまっても、本体がここにいるわけだから、怒られはしないか……。

瓶の中の血をコップには移さず、俺はそのままラッパ飲みした。

「紅丞、おはよー。」

眠い目を擦りながら、グレイがキッチンに入ってきた。

キョロキョロとあたりを見渡し、俺の姿を見つけた。

「紅丞ー。何して………紅丞っ!？」

グレイは驚愕した。

そりゃあ、そうだろう。せっかくコツコツ貯めてきた血を目の前で飲まれて、驚愕しない方が変だ。

でも、 그레이が気付いたときにはすでに遅く、俺は瓶の中の血を一滴残らず飲み干してしまっていた。

「っ……ふうー……。」

味は、やっぱり血の味がした。……でも、何かが変だった。

何というか、酸っぱいような、甘いような……人間の血って、こんな味だったっけ？

疑問を感じつつ、 그레이の方を見た。

그레이の瞳は、真っ青になっていた。

「……紅丞、まさか、全部飲んじゃったの……？」

그레이がか細い声で質問してきた。

「そうだけど……何だよ？別に全部飲んでも良いじゃねえか。どうせ俺の血なんだろう？」

俺の言葉に、何故か 그레이は首をぶんぶんと左右に振った。

「……違う。それ、紅丞の血じゃない。」

「はぁ？……じゃあ誰のだよ？」

俺からの質問に、 그레이は俯きながら答えた。

「……の。」

その言葉は、小さすぎて俺には聞こえなかった。

「……聞こえねえよ。もっとハッキリ言ってくれ。」

「だから……僕の血なんだよ。それ……。」

……はぁ？

「 그레이、冗談はやめろ。」

「…本当だよ。」

「じゃあ、何で自分の血なんか貯めてるんだよ？」

「そのうち、何かに使えるかなと思って……。」

그레이の顔や瞳が、だんだん悲しみを帯びてきた。

そして、こんなことを言いだした。

「……紅丞、人間が二十歳^{ハタチ}になる前に吸血鬼の血を飲んでしまったら、人間じゃ無くなっちゃうかもしれないんだよ？」

今度は俺が驚愕した。

……え？それって、どういうことだ？確か俺、グレイの血を飲んでしまったわけだよな？てことは……え？俺、人間じゃなくなっちゃうの？

「……グレイ、ちょっと待ってくれ、それって、どういう……。」

衝撃の事実^{事実}に、おびえた反応を見せる俺を後目に、グレイは淡々と話し出した。

「……そのまんまの意味だよ。人間が吸血鬼の血を飲んでしまえば、人間は、人間には無い力を手に入れる……つまり、人間じゃなくなっちゃう……ってことだよ。」

「そ、それじゃあ、俺……。」

「でも、紅丞の場合は違う。……紅丞は僕の――天使と吸血鬼の血を同時に、しかも大量に飲んじゃったから、もしかしたら、命に関わるような変化が出てしまうかもしれない……。」

「い、命……？」

「うん。…ハッキリ言う……。」

グレイは少し言いにくそうな顔をした後、すぐに俺の目を見て、こう言った。

「もしかしたら、紅丞は……”天使”になっちゃうかもしれない。」

「……え……？」

俺が……”天使”？

事故（後書き）

こっちではグレイについて軽く説明を。

グレイ

年齢…21歳。10月27日生まれ。

身長145センチ。

紅丞のパートナー。吸血鬼であり天使。一人称は「僕」だが、一応女の子。性格は泣き虫で甘えん坊だが我慢しがちなところがある。

キャラの誕生日、設定しました。

説明

僕の血は、その全体の約7割が天使の血で出来ている。

その血を、紅丞は”大量”に飲んでしまった。

……確かに、成長過程の人間が吸血鬼の血を飲んでしまえば、人間では無くなってしまう。それは事実。

吸血鬼の血”だけ”を飲んだのなら、未来ちゃんのように、性別が増えたりするだけで済む。

でも、今回はケースが違った。

紅丞は、僕の血を、”大量”に飲んだ。

……大量という部分が重要になる。

これはあくまで推測だけど……7割天使、3割吸血鬼の血を飲んだ紅丞は、吸血鬼の血の作用で人間にはない力を得ることになる。

そして、その力とは、同時に摂取した天使の血に、吸血鬼の血が作用し、紅丞の中にある人間の血の部分、およそ7割を天使に変えてしまうというもの。

……簡単に言うと、僕の中の吸血鬼の血によって、紅丞の身体全体の血の割合が、7割天使、3割人間……になってしまう。ということ。

以上のことを、僕は紅丞に説明した。

「マジ……かよ……。」

紅丞はがっくりと肩を落とした。

「紅丞……多分、あと数分ほどで、身体に見える変化が現れると思う……それがどんな変化かは、さすがに僕にも解らないけど……。」
僕の言葉は耳に入っているのか……解らないけど、紅丞はがっくりと肩を落とし、うなだれたままだった。

「紅丞、今日は学校、休んだ方がいいよ。未来ちゃんには僕から言
つておくから……。」

「……わかった。」

紅丞は俯いたまま、自分の部屋に戻っていった。

説明（後書き）

ちよっくら矛盾が生じても、作者は気にしない人です。

絶望

「畜生っ……。」

俺は自分の部屋に戻り、ベッドに倒れ込んだ。

……たった1度の過ちで、自分の運命がこうも簡単に変わってしまったなんて……。受け入れることが出来ない。

しかも、あと数分ほどで、身体に見える変化が現れてしまう……。俺は、人間ではなくなってしまう。

そうになったら……。俺はどうすりゃいいんだ？

人間としての生活を……。送ることは出来ないのか？

「……。未来……」

ふと、そう呟いてみた。

助けに来てはくれない。来るわけないんだ。

今の俺は——絶望だ。何も残らない……。

「……どうすりゃいいんだよ。」

仰向けになり、天井を見上げる。

いっそ、このまま二度寝して、起きたら全部夢でした……。ならいいのにな……。

なんて思っていた、その時——

ドクンッ

心臓が大きく脈打った。

「え……?」

今、何が……と思っていると――

「うっ!？」

急に身体が熱くなった。

な、なんだ? これ……身体中の血が燃えるように熱い……全身から汗が吹き出てる……。

背中と目が痛い……苦しい……。

そして――

「……うあああああああ……!!」

俺は気を失った。

人間天使

「うっ……。」

なんだろう……。身体がだるい……。頭が痛い……。俺、今まで何してたんだ……。？

気がつくと、時計の針は3時を指していた。

「水……。」

断水していることも忘れ、俺は壁づたいに、洗面所に向かって歩いた。

洗面所にたどり着き、さすがのように蛇口をひねる。

案の定、水は出ない。

「え？……ああ、工事で断水してんのか……。」

そんなことを言いながら、顔を上げ、目の前に掛けてある鏡を見た。

「……え？」

そこに写る自分の姿に、驚愕した。

俺の身体は、肌がまるでグレイのような真っ白い色に染まっており、黒かった瞳の色は、絶望を示す青色に。黒かった髪は……。澄んだ空のような水色になっていた。

「な、なんだよ、これっ……。」

俺の心中を察するように、鏡の中の俺の瞳の色が更に青くなっている……。

全て、思い出した。

確か俺……グレイの血を、それもかなりの量を飲んじまったんだっけ……。

それで、これか……。

「っ……笑えねえよ…。」

俺はその場に崩れるように座り込んだ。すると――

「紅丞……。」

後ろから 그레이 の声がした。

「 그레이 …俺…。」

「……ちよっと、こっち来て。」

そう言うと、 그레이 は俺の部屋に行ってしまった。

俺も立ち上がり、後に続いた。

部屋に行くと、 그레이 が深刻な顔をして待っていた。

「……ベッドに座って。」

俺は言われるがまま、ベッドに腰を下ろす。

すると、 그레이 が俺に近付き、いきなり俺の腕を掴んだ。

「……なんだよ、いきなり。」

「すぐ終わるから、じっとしてて。」

그레이 の目は、真剣そのものだった。……従うしかない、と思った。 그레이 は俺の腕を見つめ、目を見つめ、髪を見た後、こう言いだした。

「…髪と肌と目が、完全に天使になってる。」

「えっ……？」

「口開けてみて。」

驚いてる俺に構うことなく、 그레이 は続けた。

……仕方なく、口を開けてみせる。

「……吸血鬼の要素は無いみたい…。もう閉じていいよ。」

「なあ…… 그레이 、これ、何をしてるんだ？」

俺からの質問に、 그레이 は少し冷酷な感じで答えた。

「……さっき言ったでしょ？ 天使の血が7割で、人間の血が3割になるって。今、その3割の部分を採してるんだよ。……ちよっと、

立ってもらえる？」

俺は立ち上がった。

その瞬間、グレイは俺の身体にしがみつき、胸の辺りに耳をあてた。

「ちょっ……グレイ？ 一体何を――」

「紅丞、少し黙ってて。」

「……………」

数秒後、グレイは俺から離れた。

「心臓の音は人間の時と変わってない。……多分、残りの3割は、臓器のことかもしれない。」

「……でも、わかったところで何の意味があるんだよ？」

「いや、特に意味はないんだ。ただ、紅丞が少しでも元氣になれば、と思って……………」

「……気持ちは嬉しい。でも俺の知りたいことはそんなことじゃなくて……その……俺は、元の人間の身体に戻るのか？」

俺からの質問に、グレイは一呼吸おいて、こう切り出した。

「……僕は他にも、誤って天使になってしまった人間の話を聞いたことがあるけど、人間の身体に戻ったなんて話、聞いたこと無い……………」

え？

ちょっと待ってくれ…………え？

「じゃあ、俺、一生このままなのか…………？」

グレイは悲しそうな顔をして答えた。

「……多分、そうだと思う。」

「そんな……………」

嘘…………だろ？

一生、このまま…………？

こんな身体じゃ、外に出ることも出来ないって言うのに……？

「……………」

何も言葉が出ない。

放心状態…時間が止まってるみたいだ。

実際に止まってくれれば、嬉しいんだがな……。
すると――

ピンポーン

家のチャイムが鳴った――のと同時に

ガチャツと、家のドアが開いた。

……誰だ？こんな時に……。こんな姿じゃ、人に会えないって言うのに……。

そして、信じられない声が聞こえた。

「紅丞せんぱーい。いますかー？……安藤ですー。」

声の主は、安藤未来だった。

発見

「み、未来ちゃん！？……なんで来ちゃったんだろう……？」

グレイは、未来の突然の訪問に焦りを隠せない。……もちろん俺も。

「なあ、さっき、学校休むときに、”未来には伝えておく”……みたいなこと言っってなかったか？あの後、未来になんて言っただよ？」

「……”紅丞は、夏風邪が酷いみたいだから休む”って……。」

「あのなあ……今何月だと思ってるんだよ……まだ4月だぞ。明らかに嘘だっって見抜かれるにきまってんだろ。」

「……ごめんなさい。」

謝っってももう遅い。未来は来てしまった。

「……それよりもさ、紅丞。どこかに隠れないと、未来ちゃんにその姿……見られちゃうよ。」

「ああ……わかってる。」

今ここでバレたら、冗談抜きでヤバイ。

早くどこかに——と、その時。

ガチャッ、とドアが開き、未来が部屋に入ってきた。そして——

「……先輩？」

未来は、俺の姿を見てしまった。

「……先輩、どうしたんですか？その姿……。」

「いや、これは、その……。」

戸惑う俺、するとグレイが……

「待って、紅丞。……未来ちゃん、僕が説明するから——」

そして、グレイは、起こったことを全て話した。

「せ、先輩が、人間じゃなくなる……って、そんな……嘘だよ、グレイ？」

「……本当だよ、未来ちゃん。」

「そんなっ……。」

未来は、先ほどの俺同様、呆然とその場に立ち尽くしていた。

「……未来ちゃん、ちょっと、2人だけで話がしたいんだけど、いかな？」

グレイがいきなりそんなことを言いだした。

その言葉に、今度は俺が食いついた。

「ちょっと待て、なんで俺抜きなんだ？」

「……紅丞は、聞かない方がいいから。」

そう言うのと、足早に未来を連れて出て行ってしまった。

「……なんだよ、俺に聞かれたくないことって……。」

そう言いながら、ふと、ベッドに横になろうと、振り返ったときに、ある異変に気づいた。

「あれ？……服が大きい……。」

さっきまでピッタリだった服のサイズが、何故か少し大きい。手が袖に入って完全に隠れてしまっている。

足の方も、ズボンの裾が床についてしまっている。

「おかしいな……服のサイズ間違えたか？」

異変はそれだけではなかった。

……ベッドが高い。

高校入学の時に、高さを合わせて購入したはずのベッドが、異様に高く見えた。

「……どうなってんだ？」

グレイなら何か知ってるかもしれない。

俺は部屋を出て、床についてしまっているズボンの裾をまくり、階段を降りた。

リビングでは、グレイと未来が何かを話していた。

……そういえば、俺に聞かれたくないことって、何だろう？
俺は、ドアの影から、2人の会話に耳を傾けることにした。

発見（後書き）

とりあえず登場したので未来の事について紹介を。

安藤未来

年齢…17歳（多分今作から）。12月7日生まれ
身長…159センチ。

暁文のパートナー。正義感が強く、物事をはっきり言わない人が大嫌い。先輩だろうが人外だろうが悪いことをした者には容赦なく説教する。

こんなところですかね。誕生月は時期と辻褃が合うように、誕生日は適当につけました。

盗み聞き

「……未来ちゃん、以前、僕が精神的ストレスが原因で、身体が縮んでしまったことがあるよね？」

「うん……あの時は、天使が縮むって知って、結構驚いたけど……。」

「それでね……どうして僕がストレスで縮んでしまったか、わかる？」

「それは……天使だからでしょ？天使は、精神的ストレスで身体が縮むって瀬夏から聞いたことがあるから。」

なるほど、だからグレイはあの時、ほんの少しだが、縮んでしまったわけか。

「……だから天使は必然的に、精神的ストレスに耐えられるような、気の強いタイプが多いんだ。……弱いと、すぐに縮んで”消滅”してしまうからね。」

「でも、それと紅丞先輩と、何の関係が……？」

「未来ちゃん、紅丞の性格がどういうものか、解るよね？」

「うん……確か、先輩の性格は……あつ。」

未来は何かに気付いたように声を上げた。

……俺の性格と、天使の血と、どう関係してるんだ？

「確か、紅丞先輩って……。」

「……本人はコンプレックスに感じてるみたいだから、言いたくなかったんだけど……紅丞って、結構”打たれ弱い”よね？」

「うん。……軽い一言でも、簡単に傷ついてしまう……確か、そう言う人だったはず。」

……。

確かに俺は昔っから打たれ弱いが、そこまで言う必要あるか？

「てことは、未来ちゃん、わかるよね？」

「……簡単にストレスが溜まりやすい体質……ってこと？」

「そう。……要するに、”身体が縮みやすい体質”って事なんだ。」

”身体が縮みやすい体質”。

その言葉を聞いた瞬間、全身の血の気が引いていくのを感じた。

……え？

じゃあ、さつきから、服のサイズとか、ベッドの高さとか……俺が縮んでしまったのが原因……ってこと……？

そして更に、こんなことが聞こえた。

「……しかも、紅丞の場合、人間の血が邪魔をして、一度縮んだら元の大きさに戻れない可能性がある。」

……え？

「グレイ、それ、どういう——」

そこから先は、聞くことが出来なかった。

俺は放心状態のまま、ゆっくりと部屋に戻っていった——。

盗み聞き（後書き）

” 的 ” つけてよかったのかなあ…と思う今日この頃。

恐怖

「……………」

俺は自分の部屋に戻り、倒れるようにベッドに入った。

身体が……縮む？しかも、元に戻らない？

なんだそれ……最高の嘘じゃないか。

……でも、事実なんだ。しかも、最低な事実。

俺はいつか、身体が縮みまくって、”消滅”しちまうんだ。

……怖くないわけ無い。むしろ泣きたい気分だ。

まだ……まだ、未来に告白の返事を聞かないまま、終わってしまうのだろうか？

……嫌だ。俺は未来が好きだ。返事を聞けないまま消えるなんて嫌だ……。

そう思っていた、その時――

「っ!?!」

身体中に電流が流れるような感覚がした。

そして、部屋全体が急に広くなり始めた。

……違う。部屋が広くなってるんじゃない、俺が縮んでるんだ。

……身体が、縮む!?!縮みまくったら……消滅!?!

嫌だ!嫌だ!!!怖い!!怖すぎる!!!誰かつ……誰か助け――

すると

ガチャッ

「先輩、お待たせしまし……先輩っ!?!」

未来が一人で部屋に入ってきた。

「せ、先輩っ!?!」

俺の姿を見て、未来はすぐに俺に走り寄り、俺の身体に触れた。すると、身体の収縮が止まった。

「先輩、何があったんですか!？」

「わかんねえ……。急に身体が縮みだして……。」

俺の身長はもう、未来の膝下ぐらいにまで縮んでいた。服もブカブカで、少し脱げかかっている。

「……なあ、未来。俺……元の大きさに戻れないのか?」

「え?……まさか、さっきの話、盗み聞きしてたんですか!？」
俺は小さく頷いた。

「なんてことを……。盗み聞きなんてしちゃダメじゃないですか!」

「……ごめん。……なあ、俺、このまま縮みまくって……消滅、しちまうのか?」

「そ、それは、その――」

「俺、消えちまうのか?死んじゃうのか?……どうなんだよっ、未来――」

その瞬間、未来は急に、小さくなった俺の身体をぎゅっ、と抱きしめた。

「っ……え?」

今、俺、抱きしめられてる?……未来に?

……心臓が俺の胸の奥で暴れてる。

未来……凄く暖かい……このまま眠ってしまいそうだ……。

すると、”トクッ、トクッ”という規則正しく動く、心地の良い音が耳に飛び込んできた。

これは、未来の心臓の音だ。しかも、かなり速い。

「……未来?」

「……私、もうこれ以上、先輩を縮ませたりしません。絶対に元に戻して見せます。」

断言された。でも――

「でも、もうこんなに縮んじまってんのに……どうするつもりだよ……？」

すると、未来は俺を離し、俺を見つめ始めた。

……至近距離で目があるっている。心臓が更に鼓動を速める……。

「み、未来、何するつもりだよ……？」

俺の質問に答えることなく、未来は意を決したような表情をすると、俺に顔を近づけてきた。

俺は反射的に目を閉じる。

そして――

唇に、柔らかい何かが触れた。

そっと目を開けてみると、未来の顔がすぐ目の前にあった。その距離、0?。

突然のことに理解が追いつかない。

今、俺、未来と……”キス”してんのか？何で？

すると、その瞬間、またしても、身体に電流が流れるような感覚がし、俺の身体は、徐々に成長していった――。

希望？

身体が元の大きさに戻った。

でも、未来はまだ俺を離してくれない。

……そろそろ苦しくなってきた。

「んっ……。」

未来…離してくれ……。

口が動かない代わりに、心の奥でそう念じる。

すると、念が通じたのか、未来は俺をそっと離れた。

「っ……はあっ……。」

俺はベッドの上に倒れ込む。

心臓の鼓動が僅かに身体を揺らしている。

「先輩、元の大きさに戻ってるじゃないですか。」

未来は余裕な表情を浮かべている。

「はあっ……そうみたい…だな…。」

「…大丈夫ですか？」

「……んなわけあるか。…頭は混乱してるわ、全身から汗が吹き出るわ、心拍数は上がりまくってるわ……もうわけわかんねえよ…。」

今、何が起こったんだ？」

「えっと……先輩は、身体が縮んでも、元の大きさに戻らないわけじゃなくて……」キス”をすれば元の大きさに戻るみたいなんです。」

「

「き、キス！？」

「はい、……それも、相手は私じゃないとダメなようで……。」

未来は軽く目を伏せながら言った。

「ま、マジか？」

「……実際に戻ったんですから、疑いようが無いじゃないですか。」
「いや、そうだけど……え？何でキスなんだ？」

俺からの質問に、未来は少し真面目な顔をして答えた。

「……盗み聞きしてたのなら知ってると思っただんですが、天使は、精神的ストレスが原因で、身体が縮んでしまうんです。……ここまではいいですね？」

「ああ。」

「で、それを戻す方法は……」恋”なんです。」

「恋？」

「はい。……正確には”恋に満足した状態”なのですが……わかります？」

「……ごめん、解らない。」

「じゃあ説明しますね。」

そう言うと、未来はいきなり俺の手を掴んだ。

「……何赤くなってるんですか？」

未来が呆れながらそんなことを言う。

「し、仕方ないだろ……早く説明してくれ。」

俺は目をそらしながら答える。

「……今、こうやって私が先輩に触れてる間、先輩はずっとドキドキし続けるわけですよね？」

「まあ、そう……なるけど。」

確かに、こうやって未来に触れられていると、心拍数が更に上がっていくのが解る。

「……これが、”恋に満足した状態”です。」

「え？……ごめん、解らない……。」

「ほら、好きな人と一緒にいるだけでドキドキするとか、よくある話じゃないですか？」

「まあ、確かに……。」

「ああ言う感じが、世間一般に言う”恋”なのは解りますよね？」
「す、少しは……。」

「で、今こうやって、触れ合っている状態が”恋に満足した状態”
って事です。」

「……でも、さっき、未来が俺の身体に触れても、元には戻らなかったぞ?」

「それは、先輩の中にある、3割の人間の血が邪魔をしているのが原因です。あれくらいでは元の大きさには戻りません。」

「だから、キスなのか……。」

「はい。先輩はある意味、”縮みやすく、元の大きさに戻りづらい”。そう言う体質なんです。」

「……てことは、ちよつと待てよ?……キスでしか元に戻れないってことは……。」

「……しよっちゅうキスする羽目になりますね、私達。」

「ま、マジかよ……。」

そんなことになったら、命がいくつあっても足りねえよ……恥ずかしさと緊張で精神崩壊するかもしれねえよ。

「でも、いいじゃないですか。先輩って、私のこと好きなんですよね?」

……え?

「今、なんて?」

「え?…ですから、先輩って、私のこと好きなんですよね?……自分で告白したのに、忘れたんですか?」

「……覚えててくれたのか?」

「え?」

「告白したの、覚えててくれたのか?」

「…当たり前じゃないですか。」

「……そっか……。」

ふと、俺の目から、大粒の涙がこぼれた。

「せ、先輩……?」

「いやあ、俺てつきり、未来が、俺が告白したこと忘れてるんじゃないかなとか思ってた……。」

袖で涙を拭きつつ、そう言った。

「忘れるわけ、ないじゃないですか。」

「だよなっ……すっげえ嬉しい……。」

涙が止まらない。

「……泣かないでくださいよ。」

未来が心配そうに俺の顔を覗く。

そして、こう言いだした。

「……実は私、今日は先輩に伝えたいことがあって来たんです。」

「え？……そうなのか？」

風邪が嘘だって見抜いたから、てつきり怒りに来たのかと思ったんだけど……。

「はい。」

未来は、1度恥ずかしそうに顔を伏せ、再び俺の方を向き直り――

「私、紅丞先輩の事が大好きです。」

その顔は、はにかむような笑顔だった。

希望？（後書き）

未来の説明が前々作の瀬夏の説明と若干矛盾が生じるかと思いますが、軽く受け流してください or z

告白

紅丞先輩に告白した。

直後、先輩は思考が停止したのか、5秒くらい固まっていた。

……先輩、意外と単純なんだな…。

なんて思いながら、先輩の手を離すと、先輩はゆっくりと身体を起こし、俯いてしまった。そして…

「……うっ…。」

そのまま、また泣き出してしまった。

「せ、先輩、泣かないでくださいよ。」

「だ、だって……。」

……これで先ほどのような幼児体型ならまだ良いものの、今は高校生体型なのでかなり滑稽に見える。

「……未来。」

「何ですか？」

「俺も、未来のこと……大好きだっ……。」

ほとんど涙声だったが、言いたいことは伝わった。

「……ありがとうございます。」

私は、先ほどと同様に、先輩をぎゅっと抱きしめた。

「未来いつ……。」

先輩も、私を抱きしめてくれた。

貫い泣き——とまではいかないが、先輩のすすり泣く声に、少し目が潤んでしまった。

決意

「先輩、私と同棲しましょう。」

泣きやんだ直後、未来からそんなことを言われた。

「え？……何で？」

「何でって……私の家から先輩の家まで最低でも1時間はかかるわけですから……その間に先輩が縮んだら大変でしょう？」

「ああ、なるほど……。」

「じゃあ、私、今から帰って荷物まとめてきますね。」

「え？俺の家で同棲するの？」

「はい。」

「マジか……。」

「……だらしない生活してたら……わかってますね？」

目が怖い目が怖い。

「は、はい……。」

「では、行ってきます。」

そう言っていると、未来は足早に立ち去ろうとし、ドアノブに手をかけた辺りで止まり、こちらを振り返った。

「あの、先輩。」

「ん？」

「……私がいらないからって、縮んだりしませんよね？」

「……どうだかな。」

少し不安を煽るようなことを言ってみた。
すると、未来の表情が急に真剣になり、早歩きで俺の元に歩いてきた。

そして、素早く顎を持ち上げ、キスをした。

「んっ……！？」

あまりの速さに怯んでしまった。

10秒後。ようやく未来は俺を離してくれた。

「はぁっ……。」

息が上がっている。

「それじゃ、先輩。行ってきます。」

疲れ果てた俺を後目に、未来はそう言うのと、早歩きで部屋を出て行ってしまった。

……怒らせちゃったかな…。

決意（後書き）

思い切ったことするキャラは嫌いじゃないです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6191z/>

人間天使と性別人間

2011年12月21日19時47分発行